The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	俳諧師嘯山 : 啓蒙家の両義性について
Author(s)	藤田, 真一
Citation	語文. 1984, 43, p. 29-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68718
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

俳諧師嘯山

――啓蒙家の両義性について――

藤田真一

嘯山。三宅氏。名は芳隆。字は之元（『平安人物志』などには文中という）。別号、葎亭・橋斎・滄浪居。京都の人。漢詩を恵訓に学び、また中国白話もよくした。青蓮院の侍講をつとめたこともあるという。俳諧は巴人の弟子宋屋の門に学ぶ。多数の編著作があるが、なかでも『俳諧古選』（宝暦十三年刊）は古俳人の再評価を促したものとして著名であり、『俳諧新選』（安永二年刊）とならんで、いわゆる中興俳諧運動の基盤を作ったという意味で高く評価されている。享保三年（一七一八）生れ、享和元年（一八〇一）没。享年八十四歳。

一

嘯山は典型的な俳諧師であった。

その嘯山の文学活動には四つの要点があった。

（一）漢学者として

（二）俳諧作者として

（三）批評家また中興俳諧の先駆者として

（四）秀吟集の選者として

俳諧師であるかぎり、（二）の「俳諧作者として」の活動はいわずもがなである。彼自身の発句集である『葎亭句集』（享和元年刊）には二千句以上の多きにのぼる発句を収録する。しかしその量の多さとは裏腹に、中興期俳人のなかにあってそれらはほとんど評価されることはない。豊かな鑑賞眼あるいは鋭敏な批評精神の持ち主であることとすぐれた実作者でありうることとは別物であるという、古くて新しい（つまり陳腐な）議論を蒸し返すつもりはない。本稿の目的は別のところにあるので、以後嘯山の実作については触れないこととする。

そこではじめにもどって、（一）の「漢学者として」の嘯山のありようからみてゆく。漢詩を恵訓に学び、また芥川丹丘や石川麟洲らとも親しかったという。『平安人物志』（天明二年版）には「学者」の頃に（「俳諧師」の項にでなく）記載され、彼の没後建立された碑銘には「居常講二経論史一、諄々不レ倦」としるす。また江村北海編『日本詩選』（安永三年刊）に四首入集するので知れるように、漢詩人としても名が聞こえる。漢詩は『嘯山詩集』全十巻（写本）によってその全貌を見ることができる。その他『通俗酔菩提全伝』『通俗女仙伝』など中国白話小説の訳書をも残す。彼は大坂懐徳堂の三宅石庵そしてその弟観瀾と同族の家柄であったともいわれる（碑銘）。

次に（三）の「批評家また俳諧中興の先駆者として」の嘯山について。嘯山が今日、また歴史的に高く評価されるのはこの点においてであり、あるいはこの点についてのみであるだろう。『俳諧古選』（以下『古選』と略称する）は芭蕉など元禄俳人を中心とする古俳諧の再認識を促した点において、『平安廿歌仙』（明和六年刊）は連句について復古的新風を実践した点において、そして『俳諧新選』（以下『新選』と略称する）は、『古選』に対して、新しい発句のあり方を示そうとした点において、以後の俳諧の中興運動に少なからぬ影響を及ぼした。注目すべきは、これらはいずれも、古きに帰ることによって憂うべき現状を打破し新風を起こそうと目論だことである。『新選』の序文に、嘯山自身が、集中に「古調にちかき」句のあることを賞賛し、「今にして古きに復らずは、はたいづれの時をかまたん」と高らかに述べるように、復古であることが『新選』の「新選」たるゆえんであるというパラドックスを中興運動は内包していた。そういう中興運動の推進に、嘯山の一連の編著作が果した役割は小さくはないだろう。

このような文学思潮はもちろん俳諧独自のものではなかった。詩作に当っての範を唐詩に求め、『唐詩選』を賞揚した護園学派の文学思潮が俳諧の思想に影を落していたことは明白であろう。『古選』の出版と成功が、服部南郭によって和刻された『唐詩選』の体裁やその流行に負っている面が多大であることは、すでに田中道雄氏によって詳細に立証されている（『『俳諧古選』の成立』・『近世文学作家と作品』〈一九七三年〉所収）。

嘯山が『唐詩選』に親しんでいたことを示す別の証拠がある。『嘯山詩集』巻八には五言律の詩が収録されている。その冒頭の「送崔融」と題する詩には「以下依唐詩題擬作」と注記がある。そして以下『唐詩選』巻三「五言律詩」から二十四の題を借りてきて、その題のもとに三十五首の漢詩を掲載する。たとえば、

蓬莱三殿侍レ宴ニ咏ニ終南山一
葱鬱南山色　遥臨北斗城
乾坤分節序　日月定陰晴
雲接蓬莱麗　気通仙掌清
侍臣恩沢渥　挙盞祝ニ寧乎一

（返り点・送り仮名等は私に付した）。

は、『唐詩選』の杜審言の詩、

蓬莱三殿侍レ宴ニ奉レ勅咏ニ終南山一
北斗挂ニ城辺一　南山倚ニ殿前一
雲標金闕迥　樹杪玉堂懸
半嶺通ニ佳気一　中峯繞ニ瑞烟一
小臣持献レ寿　長ク此ニ戴ニ堯天一

に依って作すという具合である。このような『唐詩選』に対する親炙が『古選』を生み出す源となったのであろう。嘯山は『唐詩選』中の詩に擬して詩作しただけでなく、『唐詩選』の本そのものに擬して俳諧書を作った、それが『古選』であった。

嘯山の、俳諧史に与えた最大の功績と評される『古選』は、俳諧師嘯山が自己の漢学の素養を見事に生かした傑作だったのである。

二

以上述べたような嘯山の姿は既知のものである。また嘯山に対する評価もそのようなものであった。しかし俳諧師としての嘯山には

表

（この表は永井氏稿「中興期上方の奉納四季発句秀吟集」中の表をもとに新たに数点追加して作成した。）

書名	年記	発企	選者	奉納先	寄句数	選句数	備考
俳諸亀背	安永四年序	兵庫水翁	嘯山	天満宮　生田神社	一万二千余	五百	
〔辛崎布留奉納集〕	安永六年跋	近江　止角ら	嘯山	辛崎布留両社	一万	六百三十	
抜萃 二万句 蘆の錦	天明六年序	嘯山	嘯山	鳥羽実相寺	二万	千五百	蘆の丸屋再興記念
三綱柏	天明六年序	讃岐　鴛竜	古行・嘯山・二柳	石清尾・中黒・丸亀三祠	一万	六百五十	
をのゝちぐさ	天明八年奥	摂州小野　青牛	嘯山・青羅		五千	三百十	
奉納 幾太佐可那	寛政元年序	若狭　希竜・一和	嘯山	廿八社	六千	三百	評註あり
はな筏	寛政三年序	嵯峨　魯哉	嘯山	松尾大明神	一万四千余	七百額上百余	評註あり
〔七晃〕	寛政五年序	伏見　幾行	嘯山	深草七面官	七千	三百五十	評註あり
抜萃 万句 花角抵	寛政六年序	嘯山門社友	嘯山		一万三千余	六百五十	
俳諸 井出の玉川	寛政六年序		斗雪				寛政元～五年月並句合集
〔花の春〕	寛政九年序	伏見社友	嘯山・闌更ら八名	伏見村田百兵衛古稀記念	二千	五百	
美津星	（寛政十二年以前）		嘯山・寸砂・魯哉	鳥辺山	五千二百余	六百	
七化	寛政十二年序	伏見魯村・古洞	嘯山	稲荷明神五社	七千余	四百余	
俳諸玉箒集	寛政十二年奥		嘯山				月並句合集
俳諸 かれ蘆	享和三年奥	李流	李流	（嘯山追悼）	（不明）	千二百	
俳諸 花の杖	文化四年序		斗雪		一万三千余	六百十	
俳諸ふたつてん	文化五年序	丹波清田寸長	嘯山・李流	洛二天尊	一万	四百余	
〔玉川句集四篇〕	文化六年序		斗雪				文化元～五年月並句合集
〔俳諸悟りの道〕	文政元年序	五斗ら	李流ら九名	摂州勝尾寺	三千	二百七十	
〔俳諸新選発句集〕	（不明）		多数	洛中の諸社寺			月並奉額集写本
〔滄浪居冠芳斎撰円並発句集〕			嘯山・寄節				秀吟集の合綴

もう一つの側面があったことを見落してはならない。それが（四）の「秀吟集の選者として」の嘯山である。

管見にはいったもので、嘯山およびその門流がかかわった選句集は別表のとおりである。永井一彰氏稿「中興期上方の奉納四季発句秀吟集」（『奈良大学紀要』第十一号一九八二年十二月）に従うならば、これらの選句集は「四季奉納発句秀吟集」と呼ぶのが適当であるかもしれないが、本稿では、奉納されたものに限定しないので、以下「秀吟集」と一括称することとする。

嘯山一門の奉納発句秀吟集は安永四年（一七七五）の『俳諧亀背』をもって嚆矢とするようである。『幾太佐可那』の序文に「いむじ安永のはじめ、滄浪居の門に入しとき、兵庫の水翁一万のほ句寄を催し、ただちに一万二千を得たる。それより処々にて」奉納句集がはやったと述べるのに従うなら、この兵庫の発句寄たる『亀背』こそ最初の奉納句集ということになる。ただし別の形の秀吟集である月並句合は、『俳諧玉篇集』（寛政十二年刊）の嘯山序文によると、「四十余年前月次ほく集を始しより幾度か小冊成し」とあって、宝暦年間にまで遡るようであるが、現存を確めえない。

永井氏は前掲論文のなかで、「安永に入って（大坂の）五流斎一門の奉納句合が隆盛に向かおうとする頃、京都でそれに倣った句合を催し秀吟集を出したのが滄浪居三宅嘯山である」と説く。はたして、大坂の五流斎布門らのはじめた句合の流行に京都の嘯山がのったといえるだろうか。大礒義雄氏が世に紹介した『岡崎日記』（宝暦八年聞書、明和元年写）という本に、「四十年来此かた俳諧はやめつれども、そこ爰にても人の句は聞およびふれ、あるは神社仏閣などに奉納の句など見及侍るに……」とあるのによると、京都でも宝暦期以前から奉納秀吟集は行われていたようである。また、俳人としても名の聞える神沢杜口の『翁草』にも次のような記事が見える。

前句付・笠附等に少々の賞を出す事は制外故、享保の末頃迄は所々奉納の絵馬に此類多く見にしが、いつしか時花止て、今に於ては絶たり。なべて世の風俗、権令をもて制止ある事は実に心服せず。おのづから廃する事は再びせざるの理なり。今は発句寄をして絵馬に上れども、博奕の類にはあらず。

前句付などに賞を出すことがまったく「制外」であったというは必ずしも正確ではないが、本稿の主題に抵触しないので追求しない。ここにいう「絵馬に上」げる発句寄というのが、まさしく奉納句合を意味していることはまちがいがない。このなかで注目されるのは、以前は俳諧が付合の文芸であることの余影を曲りなりにも残していた前句付などの奉納であったのに対し、近年は発句のみの掲額が流行するようになったという指摘である。嘯山らの秀吟集の大部分がまさにそういうものであった。いずれにしても奉納秀吟集は、大坂での流行が京に移植されたものであるとは思えない。京都における繁盛のなかで、嘯山らも秀吟集を次々と企画したのであろう。

さて選句者としての嘯山の側面が今まで（近代の研究史上）完全に無視されていたというわけではない。無視するには多すぎる秀吟集の数である。しかしそれに対する評価は次のようなものであった。

嘯山はやはり旧来の点業家に名を列して、死ぬ頃まで、神沢杜口門の中西牛行や岡田（望月）文誰門の高城都雀や自門の佐々木閑空・木村一鳳・入江斗雪等と集句の選に従っていた。嘯山の最も高揚したのは『古選』時代である。不羈不拘と唱へつゝも、因襲がやはり彼を拘束することを避け得ないのであった。

しかし、因襲の裡に捉へられざる或物があったため彼及び彼の一派は、京洛点者間に輝かしい存在となっていたのである。

（石田元季「嘯山・蝶夢・無腸」『俳句講座』改造社版　一九三三年初出）

ここでは『古選』の嘯山と点業家嘯山とは、その評価の正負が逆転させられている。時代の一つの見方ではあった。「旧来の点業家に名を列して」いたことが非難の対象になるならば、非難の矛先は嘯山にのみ向けられるべきでない。蕪村――中興俳諧の最大の成果であり、近代の俳諧研究や俳句実作にとって、芭蕉と並んで、なくてはならない存在であった――にも向けられてしかるべきである。

蕪村が「集句の選に従っていた」証拠は少くない。吉田南畝と共に選をした『俳諧関のとびら』（安永十＝天明元年刊）は彼の現存する唯一の秀吟集であり、永井氏によると、蕪村没後一年天明四年に出た百池編の『花のちから』も本来月並句合として蕪村の選を仰ぐはずのものであったという（「夜半亭月並句合（一）」、『滋賀大国文』十八号一九八〇年）。また一昨年一九八二年大阪市立博物館で開催された「三都の俳諧」展に出品された「奉納妙見宮絵入額上」と題する募句ちらし（天明三年）は、兵庫の鉄拐と大坂の吾立そして蕪村、この三名共選による奉納秀吟集の企画であった。その他蕪村の書簡に、「此度二千集相下申候」（安永七年七月五日付来屯宛）、「観音堂御奉納御所願ニ付……」（年次不明五月二十一日付東瓦宛）、「奉納句合愚考之儀」（年次不明十月三日付白桃宛）など、蕪村の選句をうかがわせる文言が散見できる。蕪村の後継者である几董も同様で、天明四～七年の几董判月並句合集が現存する。

集句の選に従事していたのは嘯山たちばかりでなかった。夜半亭一門の人たちもかかわっていたのである。蕪村が孤高の俳人であったわけではない。この点に関して嘯山も蕪村も大した違いはない。点業家であることが、蕪村の価値を落しめる事柄でもなく、嘯山の業績に水をさす問題でもなかった。むしろ立机して俳諧師となった以上、俳諧師として当然の一つの仕事であったのである。

ではこういう点者であったということを、嘯山にあっては、どのように位置付ければよいのであろうか。

三

『古選』が好評であった理由は、句の選択が秀逸であったことと同時に、ところどころに挿入された漢文の短評が鮮かであったことであると考えられる。田中道雄氏の研究（前掲「『俳諧古選』の成立」）によると、嘯山がその短評を付す際のモデルとしたものは、当時『唐詩選』の別本のように見なされていた『唐詩選註』あるいは『唐詩訓解』であった。さらに『古選』と『唐詩訓解』の評註から特徴的な評語を抽出して比較した結果、二書の用語は類似した傾向をもち、「両書の批評態度はきわめて相似たものと見做すことができる」という。

嘯山のかかわった秀吟集のうち、『幾太佐可那』『はな筏』『七晃』の三点には『古選』と同様の短評が見られる。これらが寛政元年から六年にかけてに集中しているのには何らかの理由があるのかもしれないが、序跋等に短評に関することは言及されていないので、わからない。各書、各巻の巻頭・第二（『七晃』には三番目まで）および巻軸の句――高点を与えられるべき句であろう――に評註が加えられている。評註の数は、『幾太佐可那』全十巻で三十、『はな筏』

全十四巻で四十（第一巻は巻軸のみ）、『七晃』は全七巻で二十八、計九十八である。表記の仕方は、『幾太佐可那』の評はすべて漢文であるが、『はな筏』と『七晃』には漢文評のほかに和文評もまじる（大部分は漢文評である）。

そこで、田中氏の顰にならって、この三つの秀吟集の評註から用語を抽出してみよう（ただしここでは、用例が『古選』との比較に適当な数に達しないので、ある一語を含む熟語はその一語の項目へ、たとえば「迫真」は「真」の項目へ、参入させることとする。『古選』についても同様に、田中氏の算出に基づいて集計する）。

〔幾太佐可那〕佳5　平3　力2　工2　奇2　麗2　妙1
　真1　雅1　和1　実情1　等

〔はな筏〕妙5　佳2　実情2　新1　真1　雅1　高1　興1
　温1　等

〔七晃〕新2　力1　佳1　真1　工1　興1　実1　等

〔古選〕妙32　高22　雅22　奇（新・異）23　平（温・和）23　真10
　工9　佳9　等

田中氏が選定した評語の数は、『古選』において三百四十五語であった。三つの秀吟集に見られる評語の数は、その傾向を『古選』と比較するに十分な量とはいえないだろう。しかし、「妙」や「平」の多用、「佳」「工」「雅」「力」「真」など、『古選』の評で用いたと同じ用語を使用していることは見てとれる。

また評語の書き方もたとえば次のようである。

さゝ浪の月推上て浦涼し　　希龍
　湖辺佳景　中七字甚有力　　（『幾太佐可那』巻八）

いひ合すやうに喰やむ蚕かな　　一和
　可謂不言妙也　　（『はな筏』巻二）

長恨歌うたふ局やはるの雨　　何有
　風流可想　正是清紫之徒歟　　（『七晃』巻五）

『古選』のそれはたとえば次のようであった。

辛崎の松は花より朧にて　　芭蕉
　婉麗　格亦高絶

文は跡に桜さし出す使かな　　其角
　目下佳趣　人還不能言

春の海終日のたり〳〵哉　　蕪村
　平淡而逸

句の左に細字で評する形式が『古選』の方式を受け継いでいる以上に、その表現の様相が酷似している。『古選』において成功した方法を秀吟集に踏襲したわけである。

実は秀吟集の句に評註を付するのは嘯山だけではなかった。蕪村没後夜半亭を継承した几董も月並句合に判詞を載せる場合がしばしばであった。嘯山一門と夜半亭一門とは、俳系の上でもごく近い関係にあり、俳壇的にも近しいあいだ柄であったし、また俳諧に対する考え方もそれほど懸隔があったわけではない。同じような方式の（といっても一方は奉納集、一方は仲間のうちでの月並句合という性格の違いはあるが）秀吟集を試みていても奇異とするにはあたらないだろう。にもかかわらず、これら二家の評註の仕方にはいくつかの相違もある。その一、嘯山の方は、句集のすべてでなく、ごく一部に評が付されているのに対し、几董のには、全部もしくは大部分に付されていることが多い。その二、嘯山のものは、和文評もあるとはいえ大部分が漢文評であるのに対し、几董のは、大部分が平仮

名表記和文評であり、漢文評は例外的である。それも「雨中春色」とか「幽艶」といったものが多く、厳密に漢文といえるのはごく少数である。その三、嘯山のものは、一行のみの短文で簡潔を旨とするのに対し、几董のは、数行にわたる長文の場合もしばしばで、懇切丁寧な配慮がなされている。几董の句評の用語や表記など、その態度はおおむね、蕪村の句評のそれを踏襲しているようである。したがって嘯山のものと几董のものとは別個に考えた方がよいと思われる。嘯山は、彼独自の趣向として『古選』の経験を秀吟集に生かしたと考えるべきであろう。

こうしてみると、『古選』の嘯山と選句者嘯山とが褒貶を異にするということは、簡単にはできないだろう。俳諧師嘯山としては両方一貫した仕事であったはずである。そしてそれが漢学の深い素養に裏付けられたものであったことが、他の俳諧師と一線を画する、嘯山の最大の特徴であった。

四

嘯山社友編『発句手引艸』(嘯山序)は寛政十二年自序、小本一冊の本である。その書名が示すとおり、初心者向けの発句手引書である。序文と、総論ともいうべき発句実作の解説が冒頭にある。本文は上五文字之部・中七文字之部・下五文字之部に分かれ、それぞれにふさわしいと思われる語句を列挙して、「初心のたより」とした。その序文は次のとおりである。

物の始にはみな則リをもて道すく事、古くよりの教也。よつて有物有則といふ。中にも俳諧は俗語をもて体とすれば、入る事易し。されどこれも亦則によらざれば暗し。此書そこを考へ、初心の道しるべたらん詞をかい集めて、世に広うせんとす。例をもていはば、詩家の『円機活法』『詩語砕錦』、和歌の『八重垣』詞寄セ等に同じ。初心の人之に依て入もて行かば、漸次に浅きより深きに歩み、中より種々の微妙も顕れ来りて、我知ず楽ミ尽せざる場にも至るべし。これを法より入て法の外に出、外に出て法を離るるに非ざるの妙所といふ。見む人こゝに工を擬し、さは作者の意にも背ず、はた生涯の楽とも成なんと、社友某の乞ふに応じ、強て之を草す。はた作者の意にあふやあはずや、それも知らず。はてまゝの皮よ。

これによると、漢詩実作の手引書『円機活法』『詩語砕錦』、あるいは和歌実作の手引書『和歌八重垣』の俳諧版ともいうべきものを目ざして、この本は編集されたようである。

このうち『円機活法』は中国明時代に編集された周知の詩作実用書であり、日本でも江戸時代大いに利用されたことはよく知られている。

また『詩語砕錦』は永田観鶩編、明和五年刊、小本一冊の書で、詩題に適合する五言もしくは七言の語句を列挙したもので、初心者の作詩の便に供した書である。その序文に言う、「今 就レ題ニ選レ辞、臚列(並べること)備ニ綏急ニ。蒙士(無知の人。ここでは未熟の人の意)得レ之ヲ、猶レ入ニ波斯肆ニ」と。「波斯肆」とは、その昔唐の都長安で華麗なペルシア紋緞を売った店のことである。この書に導びかれてことばを選び詩を作れば、未熟な初心者といえどもたちどころに、豪華なペルシア紋緞が手に入れられるように、見事な詩をものにできるという。詩作を志す者にとって魅力的な文句ではないか。看板どおりの実効を発揮したかどうかわからない。ただ次に掲

げる、本居宣長の『玉勝間』巻四のなかの「初学の詩つくるべきやうを教へたる説」という文章は参考になるだろう。

ちかきころあるじゆしやの書る物を見れば、初学の輩の、から歌を作るべきさまを教へたる中にいへるやう、「所詮作りならひに、二三百もつくる間の詩は、社外の人に示すべきにもあらず、後に詩集に収録すべきにもあらざれば、古人の詩を、遠慮なく剽竊して、作りおぼえ、なほ具足しがたくは、『唐詩礎』『明詩礎』『詩語砕錦』などやうの物にて、補綴して、こしらゆるがよき也」といへるは、まことによきをしへざま也。

日本思想大系『本居宣長』の頭注によると、「あるじゆしやの書る物」とは京都の儒者江村北海の『授業編』七(天明六年刊)であるという。宣長はそのなかから「詩学第三則」の一節を引いて、「まことによきをしへざま也」という。これは、「漢意」を極度に排したはずの宣長が漢詩実作の勧めを説いている点で興味深い一節であるが、本稿の主題は別のところにある。すなわち、第一に、詩作上達の要点は「剽竊」にあるとすることと、第二に、その参考書に、嘯山が範を求めたと同じ『詩語砕錦』を推挙している点である。第一の点については、この手法は中興期俳諧にも通用するものだろうことを、第二の点については、当時多くの漢詩の初心者向け手引書が出版されたなかでこの本が特に珍重されだろうことを、うかがわせるものである。

次に『和歌八重垣』、これは有賀長伯編、小本七冊、元禄十三年序の本であるが、後まで幾度も重版されたようである。七冊のうち、はじめの三巻は和歌の歴史、会席の作法、和歌の病、題のよみ方などの知識を与えようとしたもの、四巻以降は「もろもろの詞を部類して註釈をくは」えた(序文)ものである。この四巻以下が『発句手引艸』の見本となったわけである。そして初心者が和歌を詠む際の心得を次のように述べる。

とかく初心者の程は、上下につくりかへても、いづれをよしいづれをあしゝともわきまへがたし。所詮歌かずを読てつくりならひ、又は古歌の句づくりを心にあまなふべし。

『発句手引艸』では、この本の効用について、序文のあとに次のようにいう。

たとへ天ざかる鄙のむくつけ男、秣かる童の、此道夢にだにしらぬ族も、此書によりて、上五文字・中七文字・下の五文字をつづりならぶる時は、発句の姿、たちまちととのふべし。

以上挙げた実作書、『発句手引艸』およびそれが手本とした詩歌の実作指南書に共通する「創作のすすめ」を整理すると次のようになるだろう。その一、巧拙はとわず、ともかく沢山作ること、その二、古人の作の一部を拝借してくるか、既成のことばを組み合わせるか、いずれにしても表現の独創性を、少くとも初学者は追求する必要がないこと、その三、したがって、創作とは何らむつかしいことでなく、簡単なものであると思い込むこと、などであろう。『詩語砕錦』『和歌八重垣』そして『発句手引艸』の三書がいずれも小本仕立であったという本の形態上の共通性はこれら性格上の共通性を裏付けるものであろう。

五

では具体的に、どのようにして早く沢山の発句が作れるというのだろうか。『発句手引艸』は誰にでもできる句作へと懇切丁寧に導い

てくれるはずである。それはこうである。

たとへば、「鶯」といふ題を得る時、上の五文字に「鶯や」と置て、中の七文字・下の五文字を、見合せつゞるべし。「時鳥」といふ題ならば、上の五文字に置か、又は下の五文字に「ほとゝぎす」と置て、中の七文字と、上下のかけ合を案べし。

さらに「鶯や国栖の翁の笛の弟子」という貞室の句を例句として、発句に必要な三つの条件を解説する。

「うぐいす」は題なり。「国栖の翁」は見付たる処也。「翁の笛の弟子」といふ処作者のはたらき也。五・七・五の内を、題と見付処と扨はたらきとなり。

五・七・五各句のことば選びのポイントは「題」と「見付処」と「はたらき」の三点であると教えてくれる。「題」は既にある。「見付処」と「はたらき」にふさわしいことばを選び出せば、一句できあがるはずである。

この教えに従ってわたくしも句作を試みてみよう。

鶯やめでたきやどのまくらもと
時鳥客も主人も戸をひらく

上手いだろうというのでは、もちろんない。むしろ駄作の見本である。嘯山翁のもとに投稿しても、一顧だにされず打ち捨てられるものと確信する。いま大事なのは傑作を作ることではない。これらの試作に用いたことばはいずれも『発句手引艸』から拾ったものである。大事なのは、この書のあちらこちらを繰れば、ほんの数分で、駄句であろうが、一応発句の形にはなるということである(「発句の姿、たちまちととのふべし」)。「鶯」を題とすれば、さしづめ「まくらもと」が見付処、「めでたきやどの」がはたらきということになろうか。あるいは「時鳥」が題、「客も主人」が見付処、「戸をひらく」がはたらきといえよう。実作の全く経験のないものでも、この書によれば、十七音の文字をともかく並べることができる。

このような本を企画した意図はどこにあったのか。序文は「(編者である)社友某の乞ふに応じ」て草したものだった。嘯山社中に何がしかの必要性があったからこそ編集されたはずである。

嘯山あるいはその後継者がかかわった多くの秀吟集への投稿者は、そのほとんどが素人作者であったと思われる。寛政初年頃の秀吟集に見える人名は、たとえば『幾太佐可那』で七十三人、『はな筏』で百四十三人、『花角抵』では百五十四人の多きにのぼる。また一つの催しに、通常数千句、『蘆の錦』では二万句の投稿があったという。これら投句者のすべてが練達の俳人だったとは思えない。むしろごく初歩の人から熟達の士に至るまで等しく投句する余地があったからこそ、秀吟集が度々発企され、都市はもちろん、地方でも、盛んに行われたのにちがいない。かくも盛んになると、初心者にも簡単に句が作れるような手引が求められるようになるのも当然であろう。『発句手引艸』はそのような要請のもとに編集された、近世版はう・つうものの一種と考えられるのではないだろうか。

ここでこの本が『発句手引艸』——発句製作のみを対象にした指南書であったことに注目したい。精査に及んだわけではないが、貞門派時代の『御傘』『初学抄』『はなひ草』『世話焼草』、あるいは少し時代が下って『類船集』『小傘』『番匠童』『をだまき綱目』など、ことごとく連句のための作法書・式目であり、あるいは付合用語辞典であった。蕉風以後を見ても、『古今抄』『芭蕉翁廿五ケ条』や、中興期の『附合小鏡』『附合手引蔓』など、圧倒的に連句のための

指南書であった。もちろん発句について触れてないではないが、それはあくまで連句の冒頭の大切な一句としての取り扱いである。風悟編『正風発句大概』（天明六年刊）、蓼太編『発句小鏡』（天明七年刊）が発句のみを対象とした早いものであろう。前者は美濃派の書、後者は江戸蕉門のものである。京都におけるものとしては、『発句手引艸』が最も早いものといえるのではないだろうか。前掲杜口の『翁草』のなかに、以前は前句付などの奉納集が盛んだったのに対し、今は発句寄の奉納句集がはやっていると述べていることと、発句のみを対象とする手引書の出現はまさしく対応する現象であるといえよう。

六

ところで、近世後期から幕末・明治初期にかけて、いわゆる月並句合が江戸・上方・名古屋ほか全国的に盛行を極めた実態が、近年の研究で明らかになりつつある。この月並句合の流行のためには大衆の動員が必要であった。近世後期に類題発句集が頻繁に出版される背景には月並句合に参加する素人俳人の大量の輩出があったことが、桜井武次郎氏によって指摘されている。桜井氏はその事情を、「上方の月並句合」（『連歌俳諧研究』第五十三号一九七八年八月）において、次のように考察する。

……ただ言えることは、陸続と編まれる類題句集が、月並句合に参加しようとする多数の人たちに争って買われただろうと思われることである。多数の庶民が月並句合に参加出来たということ、つまり、何とか発句らしいものを作ることが出来たということの背景には、参考書として類題句集の果たした役割が大きいだろう。この類題句集が月並句合の宗匠によって多く編まれるのも当然であった。

そしてさらに、俳諧中興運動の大きな礎となったとされる『古選』や『新選』すら、「月並句会開催と、その参考書あるいは勉強のテキスト」としての編集意図があったのではないかと説かれている。嘯山の頭初の意図が何であれ、結果的にそのような利用のされ方があっただろうことは推測できる。『古選』の後刷本の多さはそのことを示唆するものであろう。

嘯山一門を挙げて十年以上も費して編集したとされる『俳諧独喰』（寛政十二年刊）もそのような性格を有する一大選集である。この本もやはり小本仕立で五冊からなる。本書に関する唯一の論文、金子和子氏「嘯山編『俳諧独喰』の研究」（『高知女子大国文』第四号一九六八年）には、「『独喰』は主として嘯山門流の撰句集であり、それまでの『古選』『新選』とはかなり趣を異にしている」という。確かに、古俳人中心の『古選』、また同時代の他門の俳人にも広く及ぶ『新選』とは異り、『独喰』は自門中心（古俳人や他門にも若干及んではいるが少数である）の撰集であった。しかし『古選』や『新選』が類題句集的な性格を有するとするならば、明らかに『独喰』もその延長線上にあるものである。

この本には一つの趣向がある。それは、句の眼目たるべき箇所に圏点を施すという試みである。凡例に次のようにある。

一、、、、　　ヤヽ佳ナル物
一、、、。。　　一段高キ物
一、。。。　　超群ナル物
一、。。。。。　　絶妙ナル物

これはむろん一句の表現の特長を符号によって指摘するためのものであるが、読者（おそらくは実作者）は句作の際に表現の工夫の手掛りとするだろう。そういう意味で、素人俳人の参考書と十分になりうる本である。

翻ってみれば、この趣向は嘯山にとって必ずしも新しいとはいえないものである。なぜなら、これは、『古選』において「寓意微妙」とか「語極精工」などと評したものの別の評し方と見られるからである。その証拠に、伴蒿蹊は序文のなかで「これよりさきの撰どもゝありて、評語はからぶりもて書給へるを、こたびはまた批点・圈点を附して其麗語佳境をしらしむとなり」と述べている。「さきの撰ども（複数）」とは、『古選』だけでなく『はな筏』などの評註入り秀吟集をも含めていっていると考えられる。その評註と同様の目的をもったものがこの批点であった。これはまさしく、一般に漢詩漢文で秀逸な字句に施す批点の、俳諧への援用にほかならない。このことが『独喰』と他の類題句集と一線を画する大きな特徴になっているとすると、嘯山は自己の漢学者としての側面を極めて有効に生かしたといえるだろう。

『独喰』の出版された寛政十二年は『発句手引艸』の出た年でもある。この年はまた、奉納秀吟集『七化』のほか、月並句合『玉箒集』も刊行された。当年に限ったことではないが、頻繁に企画される秀吟集とそれにつれて増大する俳諧人口（素人俳諧者）の需要に対する、二種類の対応の仕方を示したもの、それが『独喰』と『手引艸』ということにならないだろうか。すなわち、『独喰』が発句製作の学習参考書としての具体例の膨大な（三千五百余句）列挙であるとすれば、『手引艸』は実作現場へ材料を提供することばの簡便な陳列である。

こうした参考書の出現が江戸後期の大衆的な月並句合の流行をうみだす一つの要因となったことは疑いない。しかし俳諧人口の量的増大と俳諧の大量生産が、即文学的水準の高揚につながるとは限らない。十九世紀日本の俳文学の大量生産は、文学の大衆化と呼ぶよりも、カルチュア・センターのごとき文化現象――文化の大衆化というにふさわしいだろう。たった十七文字で文学的な思いを語らなければならないという、世界的にも類を見ない俳諧の困難は、ほんの十七文字で一とおりの文学的趣味を満足せしめるという安直にすり替ることができるのである。その安直を積極的に提供したのがたとえば『手引艸』であり、生産されたものを発表する機会が月並句合であり奉納秀吟集であった。その下地を作った有力な一人が嘯山であった。

『発句手引艸』に再びもどってみよう。そのなかに並べられたことばに次のようなものが見える。たとえば、上五文字之部には「いとまなき」「すぢかひに」、中七文字之部には「かごとがましく」「竹三竿に」「よそめながらに」といったことば、また下五文字之部には「小家がち」「小でうちん」「夜半の門」などのことばが見られる。これらのことばは、「いとまなき身にくれかかるかやり哉」「ほとゝぎす平安城を筋違に」（上五と下五の違いはあるが）「虫売のかごとがましき朝寝哉」「やぶいりや余所目ながらの愛宕山」など、あるいは「鶯のあちこちとするや小家がち」「鮎くれてよらで過行夜半の門」など、即座に蕪村の名句を想起させるだろう。

これらの語句がそのまま用いられた句を秀吟集のなかに見出だすことは、その全てを精査したわけではないが、稀なことである。そ

れでも、「筋違に下るひばりや淀堤／一浦」や「夕がほや奈良の五条も小家勝／雨稲」（いずれも『玉川句集』）のように同じ措辞を用いた句が拾いだせる。また『手引艸』の語句とは共通しなくとも、いわゆる蕪村的とされる措辞を含む句を秀吟集に見出だすこともできる。たとえば、「蝸牛の夫婦が并ぶ家二軒／朱扇」（『玉川句集』）の措辞は蕪村の「五月雨や大河を前に家二軒」を、「冬の月骨髄寒し松の声／呑舟」（『花角抵』）は几董の「冬木だち月骨髄に入夜哉」（『もゝすもゝ』）を、また「梅むきや美人の眉に皺二つ／鞠成」（『花の杖』）は蕪村の「青梅に眉あつめたる美人哉」を、すぐに想起せしめる。

嘯山たちが初心者用に選んだことばおよび秀吟集に実際に使用されたことばと、蕪村が用いたことば（蕪村的といわれる措辞）とが必ずしも縁遠いものではないかった。しかし選ばれたことばの親近性と、それを用いてうみだされた作品の質的高さとは別物である。高度な文学となりおおせているものと単なる文化現象の断片へと埋没しかねないものとの差である。そこが最大の問題点であろう。

嘯山と蕪村は京都における中興俳諧運動の大きな荷い手であった。その運動は、俳諧史上のみにとどまらず、日本の抒情文学史上に特筆すべき成果をもたらした。その彼らはいずれも多かれ少なかれ秀吟集に携わっていた。それは、彼らの成果の一般化ないし拡大を企図してのものだったかもしれないが、その目論見は、俳諧人口の増大と俳諧の庶民化という成功とひき替えに、文学的営みの文化現象への転落をもたらしたともいえるだろう。

三宅嘯山は、漢学者としての特質を俳諧活動に生かして、中興俳諧を高らかに推進し、と同時に増加しつつある素人俳人の要請に応えるかのように啓蒙的役割を積極的に果した。あるいはその中興俳諧運動自体に、同じ京都の中興運動のもう一方の旗頭である蝶夢においてそうであったように、啓蒙性が内包されていたといえるかもしれない。そういう意味で、本稿冒頭に仮に区別して掲げた嘯山の四つの側面は、江戸中期から後期にさしかかる上方俳壇に生きた俳諧師として、見事に象徴的に統合されていたのである。

〔付記〕本稿は、一九八二年度俳文学会第三十四回全国大会（於松山市子規記念博物館）における口頭発表の一部をもとにして成ったものである。なお、資料の閲覧・複写に関して、蔵尚之・田中道雄・桜井武次郎・上野洋三・永井一彰の各氏よりご高配を賜った。記して、謝意を表する。